（第3種郵便物認可）　2025年(令和7年)5月13日（火曜日）　讀賣

# 道あり

# 笑いのプロ 古里で落語会

放送作家 海老原（えびはら） 靖芳（やすよし）さん 72 1

長崎県佐世保市の放送作家、海老原靖芳さん(72)は、古里で「佐世保かっちぇて落語会」を主宰している。東京から一流の落語家を招き、前座を地元の子どもたちが務めるのが特徴で、今年で15年。かつてザ・ドリフターズやビートたけしさんらのテレビ番組の台本を手がけた第一人者は、子どもたちに落語を教え、地域に笑顔を届けている。

◇

「魚へんに回ると書いて何と読むでしょう？　回転ずし」「うちのイルカは歌も歌えます。なごり雪」。4月29日、同市内のホールで開かれた落語会。習って4年目という同市の九州文化学園中1年、末吉真梨さん(12)が、地元水族館のガイドにふんしたネタを元気よく披露すると、満員の約600人の客席からどっと笑い声が上がった。舞台袖にはほっとした表情で見守る海老原さんの姿があった。

「かっちぇて」は「仲間に入れて」の意味で、落語は、子どもたちの個性に合わせ、海老原さんが創作する。水族館のネタは「将来は海を守る科学者になりたい」という魚好きの末吉さんの夢を基に作った。

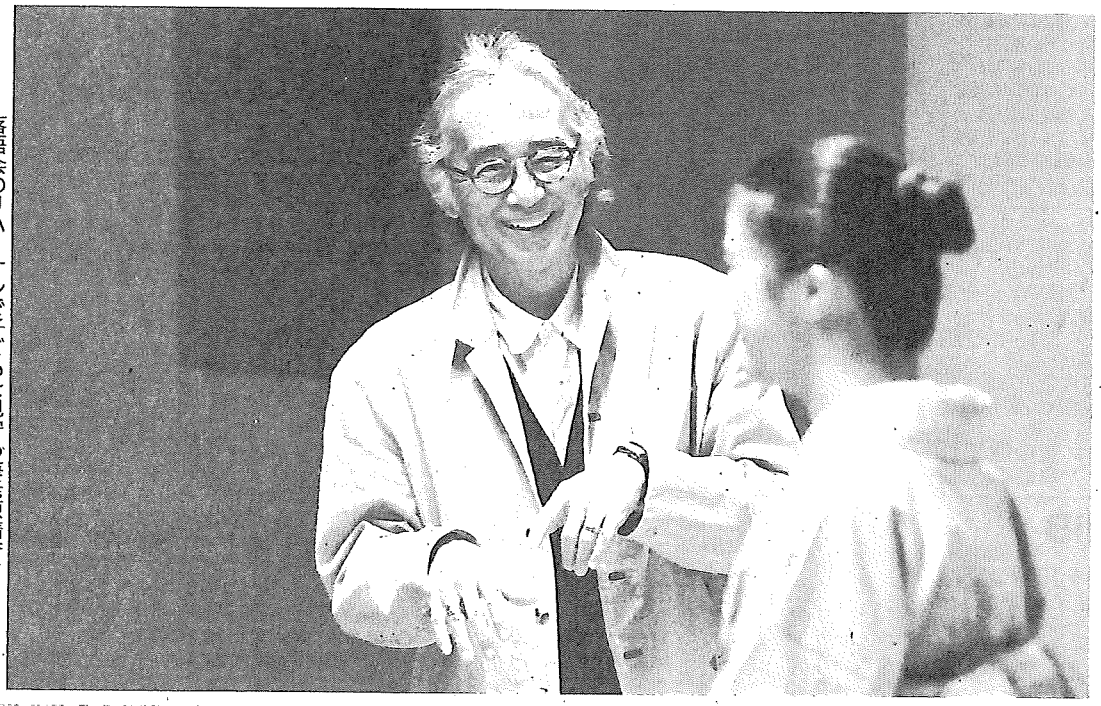
落語会は年3回ほど。前座を務めた子は、小学生から高校生まで延べ200人に上る。「大勢の前で練習の成果を披露し、笑いを取る経験は、元気や自信につながる。落語は演じる方も聞く方も感性や想像力をかき立てられる。日本語の面白さや豊かさを体感することは今の子どもたちにとって大切なはず」

佐世保市で生まれ育ち、青山学院大を卒業後、コピーライターに。1981年、人気バラエティー番組の特番を紹介する読売新聞の記事で、日本テレビがギャグのアイデアを募集しているのを目にして応募したのをきっかけに、放送作家になった。

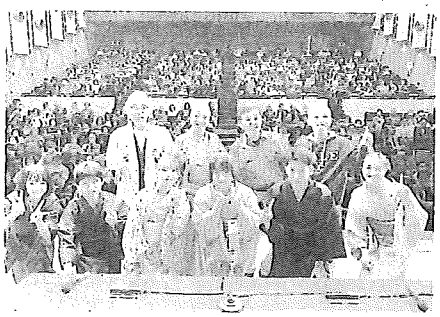
「ドリフ大爆笑」などテレビ史に残る番組を担当し、今も笑いを生み出している根底には、おかしくもかなしい、人間に対するまなざしがある。

戦後、朝鮮半島から引き揚げてきた両親と母の妹が佐世保競輪場内で営む食堂で、ギャンブルにのめり込む大人の姿を見続けた。家ではなぜか両親との暮らしにこの叔母が付き添い、3人はどこかギクシャクしていた。「外や家で大人たちの顔色をうかがううちに、人の心の機微を感じ取るようになった。楽しいとき、腹立たしいときなど、いろんな状況から面白いことを考えられるようになったんです」（計8回掲載の予定です）

※題字は書家の松清秀仙さん



落語会のリハーサルで子どもを見守る海老原靖芳さん（4月29日、長崎県佐世保市で）＝長野浩一撮影



落語会終了後、出演者たちと記念撮影する海老原さん（後列左）＝本人提供

**プロフィル**

1953年、佐世保市生まれ。「ドリフ大爆笑」「風雲！たけし城」「コメディーお江戸でござる」など人気番組を手がける。とんねるずの舞台や吉本新喜劇の台本も担当した。2009年に帰郷し、翌年「佐世保かっちぇて落語会」を始めた。趣味は映画や音楽鑑賞。

# 道あり

放送作家　海老原（えびはら） 靖芳（やすよし）さん　72　2

## 複雑な家庭 敏感な少年に

両親が戦後、朝鮮半島から引き揚げてきた長崎県佐世保市で生まれた。父靖重さんが52歳、母朝子さんが44歳のときの子で、「周りの子よりも親が年寄りで、何となく変に感じていた」。

住んでいたのは6畳一間の市営住宅。なぜか壁がぶち抜かれ、母の8歳下の妹、八重子さんの部屋とつながっていた。

半島で鉄道の駅長を務めていた父は戦後、佐世保競輪場で食堂を始め、母と叔母と3人で働いた。一家の中心は母。無口な父や優しい叔母とは、ささいなことで度々言い争い、気まずい雰囲気だった。

小学3年生頃から店を手伝い始めた。レースの合間に客が殺到し、「早よ持ってこんや」と怒号が日々飛び交った。料理にケチをつけ無料で食べたり「子どもに代金を払った」とうそをついたりする大人も多くいた。「人をだましてまで賭けをする姿はいやしく映った。一方で、そんな人たちのおかげで食べられている現実も分かっていた」

場内は酒の販売が禁じられていたが、こっそり売る父の姿を見るのもつらかった。「こんな経験をすると、人の表情に敏感になる。知らず知らず人やものの見方が養われた」

父靖重さん（左）と、母朝子さんに抱かれる海老原さん（本人提供）

気分転換はテレビだった。中古の14型には音楽バラエティーの先がけ「シャボン玉ホリデー」などが白黒で映し出されていた。植木等のスーダラ節をまねては母に怒られていた。

一家から叔母が離れない「ほかの家と違う」理由は、小学5年のある日、突然明かされた。友人にプラモデルを貸すよう求められ、断ると、「わが（お前）の母ちゃんは、叔母さんばい」と揶揄（やゆ）されたのだった。

「言葉の重さ、衝撃。頭が真っ白になった」

父は叔母と子をなし、今も一緒に暮らしている。両親と叔母は、この秘密をみじんにも出さなかった。3人を問いただしたかったが、そうすれば一家は壊れると子ども心に思い、心を押し殺した。叔母の子だと母が明かしたのは26歳のとき。父と叔母は最期まで何も語らず、いきさつは分からなかった。

それでも自分には優しかった父と叔母には、育ててくれた恩を強く感じている。母はしつけに厳しく、真っすぐな人だった。ある日、裕福な家の子と遊んでいると、その親から「下の（貧しい）住宅の子とは遊ばせられん」となじられた。母は父と叔母の制止を振り切りその家に出向き、敢然と抗議してくれた。

「俺は守られている。強く、頼もしい、本当のおふくろだ」。母への愛は揺るがなかった。

# 道あり

放送作家　海老原（えびはら） 靖芳（やすよし）さん　72　3

## ギャグ100本で面接突破

高校時代の「人生の教科書」は、雑誌「平凡パンチ」だった。ファッションや外車など洗練された都会の情報に胸躍らせた。県立佐世保南高を卒業後、青山学院大に進学し、念願の東京生活を始めた。

米国人写真家ユージン・スミスの写真を見て水俣病に関心を持ち、公害のゼミに入ったが、ゼミ生の「患者になりたくなければ、引っ越せばいい」という発言に怒り、けんかしてやめた。

組織に属するのがどうしても嫌で、就職活動はしなかった。1975年に大学を卒業してすぐ、交際中だった同じ年のゆかりさんと結婚した。妻の親族が広告を手がけていた縁で、フリーのコピーライターを始めた。

実績はゼロだったが、世に出回る広告を手に「自分だったらこう作ります」と、スケッチブックに独自のキャッチコピーを書き込んで売り込むうちに、仕事が来るようになった。

中でも当たったのが、ゲーム会社・ナムコの求人広告。「C評価」が並ぶ学生の成績表に絵本、灰皿、バイク模型など趣味的な物を並べ「『C』が多くても、いいじゃないか。」と添えた。雑誌「広告批評」元編集長の天野祐吉さんは、別の雑誌で「最近の求人広告のなかでは、Aの部類に入る」としゃれを利かせて高く評価した。

上ギャグ募集の記事が載った1981年の読売新聞の印刷データを手にする海老原さん 下海老原さんが手がけたナムコの求人広告（本人提供）

仕事は順調だが、どこか心満たされないと感じていた1981年7月1日。読売新聞夕刊の記事がふと目に留まった。往年の人気バラエティー番組の復活特番を紹介する中で、制作の日本テレビが、番組で使うギャグを募集していたのだ。

「これだと確信した」。大勢の応募の中で目立つにはどうすればいいか考え抜き、大量の100本をぶつけた。効果はてきめん。日テレのディレクターにあきれられながらも最終選考に進めた。最終面接官は「コントの天才」と称された放送作家の河野洋さん。全てに目を通し、「くだらないことをこんなにたくさん書いてきて、君はバカだな」と一言。「終わった」と思った瞬間、「バカだから俺たちと一緒にやるか」と笑顔で声を掛けられた。近くの公衆電話からゆかりさんに告げた。「通ったぞ！」

（次回は20日に掲載予定です）

# 道あり

放送作家　海老原（えびはら） 靖芳（やすよし）さん　72　4

## ドリフ 苦心もやりがい

初めて担当するバラエティー特番の1982年3月の放送に向け、メインの放送作家、河野洋さんの事務所で会議が続いた。6、7人の先輩作家に交じり、考えたコントを次々に河野さんに提出したが、「箸にも棒にもかからなかった」。

しかし、河野さんと先輩たちとの議論を聞き、酒を酌み交わすうちに、アイデアが浮かぶようになった。そこには、後に劇団「WAHAHA本舗」を主宰する喰始（たべはじめ）さん(77)もいた。

番組で15分3本のコントが必要になり、河野さん、喰さんが担当することに。チャンスとばかりに残り1本に立候補した。喰さんは「コピーライターの方が稼ぎも効率も良いのに、放送作家になるなんて面白い存在と思った」と振り返り、「よほどじゃないと入り込めない雰囲気の中、積極的に頑張る姿が印象に残っている」と語る。

採用されたのは、普段は人間で何かの拍子にオオカミなどに変身する家族のコント。放送は喰さんの自宅で見た。番組のエンドロールに自分の名前を見つけ、「放送作家になれた」と実感した。

当時のフジテレビの入館証（左）とNHKの入館証を手にする海老原さん

放送後、河野さんが代表を務める事務所に入った。30歳の頃、ザ・ドリフターズの大人気番組「ドリフ大爆笑」（フジテレビ系）の作家陣に加わった。喜び勇んでコントを書いたが、立ちふさがったのがリーダーのいかりや長介さんだった。

「つまんねぇな。だめだよ、こんなの書いちゃ」と何度もはじかれた。会議では机を挟んで作家陣とドリフの5人が向き合う。空気は重く、ピリピリし、沈黙が数時間続くこともあった。「誰も目も合わせない。冷や汗が止まらなかった」

ほかの番組の仕事も増え、ドリフを離れたが、どこか物足りなかった。「理不尽な対応だったけど、オンエアを見るとやはり面白い。もう一回やりたい」。いかりやさんを訪ねて思いを伝えると、独特のだみ声で「あえて火中の栗を拾うか」と言い、了承してくれた。

36歳で戻ってからは、果敢にアイデアや意見をぶつけた。次第に打ち解け、番組のチーフ放送作家になった。いかりやさんは人前では「権威の象徴」だったが、2人きりで話すと、笑いに向き合う真剣な一面も垣間見えた。「たとえ嫌われても自分の信じた笑いを追求する覚悟や姿勢を学ばせてもらった」

ドリフ以上にきつい現場はなかった。「それからはどんな仕事も耐えられた」と苦笑する。

# 道あり

放送作家　海老原（えびはら） 靖芳（やすよし）さん　72　5

## 志ん朝さん 魅惑の話芸

「ドリフ大爆笑」の台本を書いていた1985年、TBSのプロデューサーに頼まれ、翌年始まるビートたけしさんのバラエティー「風雲！たけし城」（TBS系）も担当することになった。

参加者が難関アトラクションを攻略する番組で、ゲームの内容や名称を考えた。たけしさんは「いいんじゃないですか。やりましょう」と放送作家のアイデアを尊重してくれた。2人で話す機会はなかったが、シャイな人柄の奥底には社会への怒りがあるように感じた。「大衆にこびず、笑いで世の中の欺まんや権威を切っていく。現状にあぐらをかかず、とどまらない姿に共感した」

自分も生い立ちや自身の境遇、社会に怒りながら仕事をしてきた。それが和らいだのは、落語と出会ってからだ。41歳の頃、その原点となる出来事があった。東京落語の第一人者、古今亭志ん朝さん（1938～2001年）との出会いだ。

作家山口瞳さんの「行きつけの店」を紹介する特番の構成とナレーション原稿を担当し、店を訪ねる志ん朝さんと大分・湯布院に向かうことになった。

初顔合わせは博多駅のホーム。新幹線を降りた志ん朝さんにあいさつしようとしたところ、向こうから「それライカじゃないですか」と声を掛けられた。風景を撮ろうと左肩に掛けていたカメラ。志ん朝さんも同じ物を首に下げており、すぐに意気投合した。

博多駅のホームで対面した海老原さん（左）と古今亭志ん朝さん（1994年2月）＝本人提供

収録中、志ん朝さんを見守るうちに、言葉の抑揚、間の取り方、表情、手の動き――。人を引きつける鮮やかな「話芸」に心をつかまれた。帰京後すぐに志ん朝さんの落語テープを繰り返し聞いて、話しぶりを覚えた。「てなことを言いますが」「うーん私はこう思います」など、志ん朝さんの調子を想定してナレーション台本を書き上げた。

番組の完成試写会後、山口さんが「よくできている。志ん朝さんはアドリブがうまいな」と言うと、志ん朝さんは「海老原さんの台本のままやっただけですよ」とさらりと応えた。仕事はこの一回きりだったが、落語と落語家のすごさを実感する、忘れられない出会いとなった。

# 道あり

放送作家　海老原（えびはら） 靖芳（やすよし）さん　72　6

## 多忙で消耗 軽井沢移住

落語家の古今亭志ん朝さんとの出会いの直後、憧れの人と仕事をすることになった。子どもの頃からテレビで見ていた喜劇役者・伊東四朗さん(87)を座長に迎え始まった「コメディーお江戸でござる」（NHK、1995～2004年）だ。

江戸時代の庶民の暮らしを芝居や歌、面白話で紹介するバラエティー。局側に「江戸の人の気持ちになって台本を書いてほしい」と無理な注文をつけられ、落語にヒントを求めた。

志ん朝さんの父で「昭和の名人」志ん生さんのテープとCDを聴き、様々な職業の人々の生活感や口調を学び、古い川柳本も読みあさった。「子を思う親の心、ワイロの誘惑など、いつの時代も変わらない心情があることに気づいた」

印象に残っている台本が「損料屋」だ。今のレンタルショップの話で、父親がいない子の依頼で、店主（伊東さん）が一肌脱ぎ、本当の父親のように振る舞う内容だ。ぼろが出そうで出ないやり取りが笑いを誘い、親子の情が胸を打った。「演じる伊東さんの姿が、おふくろと重なった。生みの親ではないが、愛情を込めて育ててくれた感謝の思いを投影させた」。台本に厳しい伊東さんから、「一字一句、直すところがありません」と絶賛された。

愛犬の死後、新たに迎えた犬を抱く妻のゆかりさん（左）と海老原さん（2007年）＝本人提供

売れっ子放送作家として、テレビ番組以外にも、吉本興業のタレント養成所の講師や、吉本新喜劇の台本も手がけるようになり、多忙を極めた。疲れとストレスが限界を超えた。45歳の頃、自然豊かな長野県の軽井沢に移住した。

一人娘が独立し、妻と愛犬との生活。しばらく穏やかだったが、愛犬が病で死ぬと、夫婦でペットロス症候群に陥った。さらに妻の親族とのトラブルにも遭い、「誰も信用できない」と思うようになった。

2008年11月、友人夫婦を招いた夕食会で、つい酒の勢いから、妻に「こうなったのはお前のせいだ」と怒鳴（どな）ってしまった。ショックを受け「死にたい」とつぶやく妻をよそに、酔いつぶれてしまい、そのまま就寝した。

翌朝、目が覚めると、妻の姿は消えていた。

（次回は27日に掲載予定です）

# 道あり

放送作家 海老原（えびはら） 靖芳（やすよし）さん 72 ⑦

## 妻と帰郷 落語会始める

暴言を吐いた翌朝、妻は消えた。捜し回ったが見つからない。後悔と不安に強くさいなまれた。友人夫婦から「家に泊めている」と連絡が入ったが、妻は自分を避けて居場所を転々とした。

4日目の朝、長崎県佐世保市の友人から、妻が佐世保にいると電話が入った。家族で毎年帰省する中で、自分の故郷は横浜育ちの妻にとっても大切な場所になっていた。

1週間後に戻ってきてくれ、謝罪を重ねた上で、これからどう生きていくのか2人で日々話し合った。「放送作家としての仕事はやりきった。これからは妻のために一から生き直そう。佐世保に帰ろう」と思い至った。テレビの仕事を断ると収入はゼロになるが、妻は受け入れてくれた。2009年11月、帰郷した。

穏やかな日々の中で夫婦の関係も戻ってきた。そんな頃、お笑いトリオ「コント赤信号」のメンバーで、落語にも精通する旧友、小宮孝泰さん(69)から「佐世保で落語会をできませんか」と電話があった。

2019年の落語会の後で、小宮孝泰さん(後列左から2人目)らと記念撮影する海老原さん(同3人目)＝本人提供

小宮さんと話すうちに、帰郷してから漠然と思っていたことが明確になってきた。「自分のキャリアを生かし、子どもたちに笑いを届けたい」

佐世保では04年6月、小学6年女児が校内で同級生に殺害される痛ましい事件が起きた。5年が過ぎても街全体が「恐ろしい街」とのレッテルを引きずっているように感じた。

事件の前年、作・演出を担当した「させぼ版吉本新喜劇」では、芸人たちと市民100人が共演し、大好評を博していた。そのとき参加した子どもが「学校で味わえない喜びを体験できた」と笑顔で語る姿を思い出した。プロの前座として子どもたちが舞台に上がる「佐世保かっちぇて落語会」のアイデアが浮かんだ。

初めは高校の同級生に声を掛けて、参加者を募った。子どもたちと話をしながら、その子に見合ったオリジナル落語を書く。週1回の稽古で身ぶり手ぶりでネタを伝え、舞台に臨む。公演の準備や設営など裏方の仕事は、趣旨に賛同した同級生や地元住民が手弁当で担っている。

初回からこれまで5回出演した小宮さんは、「ちびっ子落語家っていうのは大抵、誰か大人の口調をまねている。一方、佐世保の子どもたちは、子どものしゃべり方や個性を生かした台本のおかげで、のびのびとやっている。だからお客の受けがいいんです」と太鼓判を押す。

# 道あり

放送作家　海老原（えびはら） 靖芳（やすよし）さん　72 ⑧

## 笑い 水や空気と同じもの

2010年から始めた「佐世保かっちぇて落語会」。これまで柳家喬太郎さん、林家正蔵さん、春風亭昇太さん、立川志の輔さん、柳家喜多八さんら、そうそうたる顔ぶれが高座に上がってくれた。

初回から出演し、今年4月の第37回も舞台に上がった喬太郎さんは「（プロの前座に）子どもたちが出る落語会はほかにはないカラー。2、3回で終わってしまう会が山ほどある中、継続させていることは本当に素晴らしい。大先輩の元気で前向きな姿勢は、後進に勇気を与えてくれる」とエールを送る。

実は、4月の落語会は開催が危ぶまれた。昨年末、胆管がんが見つかり、今年2月に10時間に及ぶ大手術を受けたからだ。「死ぬかもしれないと思ったが、恐怖も後悔もなかった。これで本当に〝腹を割って話せる男〟になった」と笑い飛ばす。

手術は成功し、退院後、落語会の稽古を重ねる中で、「子どもたちのあっけらかんとした明るさが、生きる原動力になっている」と改めて感じた。

落語会前に古川さん（左）をリラックスさせる海老原さん（4月29日）＝長野浩一撮影

小学2年から出演している聖和女子学院高（長崎県佐世保市）1年の古川万葉（まよ）さん(15)は、「海老原さんは笑いに一生懸命な人。子どもたちそれぞれの面白さや表現力を引き出し、自分らしさを表現できる機会を作ってくれる」と信頼を寄せ、「演じる、見てもらう、笑ってもらえる喜びが落語にはある。もっとうまくなりたい」と意気込む。

ここまで落語会を続けてこられたのは、妻と、運営を支えてくれる高校時代の同級生たちのおかげだと言い、「利害関係もなく、佐世保のために一肌脱いでくれる。感謝してもしきれない」と繰り返す。50年以上たった今も、会えば高校時代の感覚に戻れる同級生の存在は大きい。子どもたちにはことあるごとに「今を大事に。友達を大事に」と伝えている。

「自分にとって笑いとは水や空気と同じもの。目標は少しでも長く落語会を続けること。古里の子どもたちがいるから続けられるんです」。次回の落語会は8月30日を予定している。

（井上裕介が担当しました）

＊

次回は6月3日から、老舗こうじ店「糀（こうじ）屋本店」社長の浅利妙峰（みょうほう）さん(72)を紹介します。

「道あり」へのご意見をお寄せください。宛先は社会部（s-syakai@yomiuri.com、ファクスは092・715・5509）。過去記事はオンライン九州発の企画・連載で。